

# 【体験版】 ダンジョン残業

体 験 版

# 1

## 第1話 査定対象、楓

---

査定の合格点は、俺の指1本で決まる。

契約書の18条に、そう書いてあった。

春分の翌朝、午前八時十二分。

俺は宿舎の机で、その一文を3度目に読み返している。

手元に、折り畳み手帳。

内側に、妹の写真。

志乃。

昨日届いた手紙が、手帳に挟まっている。

「お兄ちゃん、ありがとう」

手紙の文字を、俺は指で1度だけなぞった。

あと47分で、王立ダンジョン管理局付属育成

校の着任式が始まる。

俺は新任講師として、5年契約を結ぶ。

契約金から500万円が引かれ、妹の魔毒解呪費に充てられる。

かつての俺なら、こんな契約書には署名しなかっただろう。

元A級探索者の俺は、22歳で昇格した若手最有力株だった。

第六階層のスタンピード事故。

あの日、俺は右目の魔力視野を失った。

だが、今の俺は500万を返す手段を、他に持たない。

志乃の魔毒は、3年経っても抜けない。

解呪施術者は国内に2名しかいない。

その2名のうち1名は、王立ダンジョン管理局  
の主任講師の紹介状でしか繋がれない。

俺は契約書にもう一度目を落とす。

第18条、3行目。

「特別査定期間における、査定者の指示への  
全面従事」

全面、という条項を、俺は迷わず受け入れた。

ペンを取る。

署名欄に、楓と書いた。

それで終わりだった。

手帳を閉じる。

志乃の写真は、宿舎の机に置いていく。

仕事の場には、家族は持ち込まない。

着任式は教務棟の3階。

主任講師の隼は、壇上の真ん中に立っていた。

黒いコート。

左手に査定タブレット。

肩のS級徽章。

国内に9人しかいない、現役S級探索者。

隼の視線が、新任講師の列を1人ずつ撫でて  
いく。

俺のところで、1秒だけ止まった。

「楓」

俺の名前を、隼は最初に読み上げた。

「特別査定対象。第七階層担当。本日付で配属」

第七階層は、一般立入禁止区画。

授業を持つ階層ではない。

査定のための場所だった。

壇上の他の講師が、俺を見た。

1人だけ、表情が動いた。

元同期の凜だ。

A級。

俺と同じ年に昇格して、俺だけが先に降りた。

着任式の後、俺は事務局の通路で凜に呼び止められた。

「楓先輩。事故落ちで、よくぞ」

凜の声は、表面だけ柔らかかった。

「ええ、おかげさまで」

俺はそう返した。

それ以上は言わない。

仕事だ。

査定は仕事の一環だ。

「主任直々の査定対象って、聞いたよ」

凜は俺の左肩を、軽く叩いた。

元同期の親しさを装った指。



だが、力の加減は、わざとずれていた。

「お疲れさまだね、楓先輩」

俺は何も返さなかった。

志乃の魔毒解呪のために、ここまで来た。

凜の声に揺れる余裕は、俺にはない。

午後九時。

第七階層の閉鎖時間。

一般立入禁止区画。

査定室は講師棟の地下にあった。

扉を開ける。

隼が査定タブレットの画面を親指でなぞっていた。

「楓。来たな」

声は事務的だった。

抑揚が薄い。

「指示通り、伺いました」

俺は短く返す。

査定室の中央に、査定台。

壁に、探索者ライセンス首輪が3本かかっていた。

「契約書18条を、もう一度読み上げる」

隼が査定タブレットを見せた。

「特別査定期間における、査定者の指示への  
全面従事」

「はい」

「異存はあるか」

「ありません」

俺の声は揺れなかった。

志乃の写真は、宿舎の机に置いてきた。

ここでは出さない。

「では、査定を開始する」

隼の指が、俺の首に触れた。

探索者ライセンス首輪を、俺の首に巻く。

革と銀の感触。

冷たい。

「常時着用。査定期間中、外すことは許可し

ない」

「はい」

「服を脱げ」

俺は黙って、上着のボタンを外した。

1つ、2つ、3つ。

脱いだ上着を、査定台の脇のスタンドに掛ける。

次にシャツ。

次にスラックス。

順序通り、無駄なく外す。

軍服に近い動作だった。

元探索者の習慣。

脱衣も、装備の点検と同じ手順で済ませる。

下着まで脱ぎ終えた。

俺の体は、査定室の冷えた空気に晒される。

肩、胸、腹、太もも。

訓練で残した筋肉の輪郭が、隼のタブレット  
の光に照らされた。

「査定台に立て」

俺は査定台の上に立った。

台の前に、ストップウォッチ式の魔石。

査定シートが、隼の手元に置かれている。

「立ち上がり計測値、第1項目」

隼が魔石の起動印を押した。

時計が、ゼロから動き始める。

「指示する。今から、お前は俺の声だけで勃  
てろ」

「は――」

「触らない。視線も俺は外さない。声だけだ」  
俺は息を吐いた。

査定の仕事だ。

体の反応は、こちらの仕事として処理する。

「お前の右目」

隼の声が、低く落ちた。

「魔力視野を失ったのは、第六階層のスタン  
ピード事故。記録は読んだ」

「はい」

「3年経っても、夢に見るか」

俺の右目の傷を、左手で1度だけなぞった。

無意識だった。

「見ます」

「それでも、お前は冒険者ライセンスを返納  
しなかった」

「はい」

「未練か」

「仕事を、続けたかったので」

ペニスは、まだ反応していなかった。

隼の声は事務的で、抑揚が薄い。

なのに、首輪の重みだけが、俺の喉に巻きついている。

「その仕事を、今日から俺が査定する」

隼の声が、また低くなった。

「お前のすべてを記録する。脈拍、呼吸、勃起時間、射精量。今夜、初期値を採る」

ペニスの根元に、熱が集まり始めた。

俺は、自分の体の反応を読んでいた。

査定の業務だ。

冷静に、自分を観測する。

隼の指が、査定タブレットを動かす。

画面が俺に向けられた。



ストップウォッチの数字が、刻一刻と進んでいる。

「26秒」

隼の声が、数字を読み上げる。

「俺の声で、もう半勃ちになったな」

ペニスの先端が、上向きに膨らんでいた。

血管が浮く。

亀頭の輪郭が、はっきりと出てきた。

「楓」

「はい」

「お前の元同期、凜が言ったな。事故落ちで、よくぞ、と」

「……はい」

「あいつの声を、思い出せ」

俺の右目の傷が、ぴくりと動いた。

凜の声。

表面だけ柔らかい、侮蔑の混じった声。

俺の中で、何かが音を立てた。

ペニスの先端から、先走り液が一滴、糸を引いて床に落ちた。

まだ触られていないのに、体だけが先に答えていた。

ペニスが、完全に勃起上がった。

「立ち上がり計測値、26.4秒」

隼の声が、査定シートに数字を書き込む音と重なった。

ペンが紙を擦る音だけが、査定室に響いた。

「初期値、加算しておく」

短い宣告だった。

俺は息を吐いた。

「次。第2項目」

隼が査定タブレットを置いた。

査定台の縁に腰掛ける。

俺は隼を見下ろす形になった。

黒いコートの前が、開いていた。

スラックスの前が、固くなっている。

査定対象の俺を見て、隼自身も反応していた。

その事実を、俺は黙って観察する。

「採取訓練を行う。お前にやらしてもらう」

「採取……」

「俺のものを、お前の口で採取する。射精量  
と、お前の口腔反応を計測する」

俺の喉が、1度だけ鳴った。

業務名で言い換えても、行為は変わらない。

「査定台を降りろ」

俺は降りた。

隼の足元に、片ひざをつく。

あごの下に、隼のスラックスのファスナーが

あった。

「外せ」

俺はファスナーに指をかけた。

ジー、と音がする。

査定室の冷えた空気の中で、その音だけが妙に大きく響いた。

ファスナーを下ろす。

隼の下着の中で、ペニスが布を押し上げていた。

俺は下着のゴムに指をかけ、ゆっくりとずらす。

布が肌から離れる音がして、雄の匂いが、空

気に滲んだ。

隼のペニスが、出てきた。

大きい。

俺のものより、明らかに長く、太い。

血管が浮き、亀頭が赤黒く充血している。

先端から、先走り液が一筋滲んでいた。

俺の目の高さに、隼のペニスがある。

亀頭の角度が、上向きにせり上がっていた。

「啜えろ」

俺は両手をペニスの根元に添えた。

舌を出して、亀頭の裏側を1度だけ舐める。

しょっぱい味が広がった。

先走り液の塩気が、舌の表面に乗る。

俺は口を開けた。

隼の亀頭を、口腔内に迎え入れる。

「んー」

亀頭が口の中で熱を持っていた。

喉の奥まで届く感触。

俺は息を、鼻からだけで吐く。

「奥まで」

隼の指が、俺の後頭部に触れた。

強くは押さない。

ただ、位置を指示するだけの圧。

俺はペニスの根元まで、口腔で迎え入れた。

亀頭が喉に当たる。

反射で、喉が締まった。

隼が、腰を引いた。

俺の口の中で、ペニスが滑る。

唾液が、隼のペニスを濡らしていく。

「お前の口、温度高いな」

隼の声が、上から落ちてきた。

「査定値、平温37.6度。粘膜反応、良好」

俺は唾液を呑み込めない。

ペニスが奥まで来ている状態で、呑み込むと

喉が動いて、隼を刺激する。

唇の端から、唾液が垂れた。



元A級探索者の俺が、口腔の温度を業務数値として読み上げられている。

査定の名目で、粘膜反応まで記録されている。

「動け」

短い指示。

俺は頭を前後に動かし始めた。

ゆっくり、根元から先端まで。

戻って、また根元まで。

ぐぷ、ちゅぷ、と音が立つ。

唾液と、隼のペニスから滲み出る液体が混ざる音。

査定室の沈黙の中で、その音だけが鳴り続け

た。

俺の口腔内の温度が、隼のペニスの熱で1度  
ずつ上がっていく。

唇の表面が、擦れて痺れ始めていた。

舌の根元の付け根が、隼の亀頭の硬度に押さ  
れて、奥に押しのけられる。

「速度、上げろ」

俺は速度を上げた。

頭の動きが、自分の意思とずれ始める。

業務として処理しているはずだった。

なのに、舌の動きが、勝手に隼の亀頭の輪郭  
を覚えていく。

隼の指が、俺の後頭部の毛をつかんだ。

「止めるな」

短い命令。

俺は止めない。

動き続ける。

唾液が、俺のあごまで垂れていた。

「楓」

「ん——」

「お前のペニス、まだ勃起っばなしだな」

俺の足の間で、ペニスが上を向いていた。

触られていない。

なのに、隼の口に咥えながら、俺自身も完全

に勃起したままだ。

先端から、先走り液が垂れて、査定室の床に  
落ちた。

「査定値、追加。同時勃起、確認」

ペンが紙を擦る音。

俺は速度を変えない。

頭を動かし続ける。

隼の腰が、ぴくりと動いた。

ペニスの根元に、力がこもる。

俺の口の中で、何かが膨らむ感覚。

「採取に入る」

隼の声が、低く落ちた。

俺は喉を開いた。

元探索者の訓練。

異物を呑み込むときの、喉の弛緩。

反射を、意識で抑える。

次の瞬間。

隼のペニスが、ぴくりと跳ねた。

俺の口の中で、熱い液体が放出される。

1発目が、喉の奥に当たった。

舌の付け根が焼けるような感触。

2発目、3発目。

俺の口腔いっぱい、隼の精液が広がった。

4発目、5発目。

頬の内側まで、白濁した液体が押し寄せる。

濃い。

粘度が高い。

舌の表面に絡みついて、簡単には流れない。

雄の匂いが、鼻腔の奥まで満ちた。

「飲み込むな」

俺は止まる。

隼のペニスを、口に咥えたまま。

精液は、俺の口の中に溜まっている。

「採取容器に出せ」

隼が査定マグを差し出した。

俺はゆっくりとペニスを口から離し、マグに

精液を吐き出した。

白濁した液体が、マグの底を白く染めていく。

糸を引きながら、ねっとりと底に溜まる。

マグの内壁にも、精液が筋を作って張り付いた。

「採取量、十分」

隼が査定タブレットに数字を打ち込んだ。

「だが、まだ終わりじゃない」

俺は顔を上げた。

隼のペニスは、まだ硬度を保ったままだった。

「お前の口腔反応、長めに記録する。啜え続けろ」

「は——」

「射精後の亀頭は、過敏になる。それを、お前の舌で耐えさせる訓練だ」

俺は、再び口を開いた。

射精直後の隼のペニスを、もう一度迎え入れる。

亀頭の表面が、鋭敏になっていた。

舌が当たるたびに、隼の腰が、引いた。

「動かすな。咥えているだけでいい」

俺は静止する。

唇で根元を支え、舌の上に亀頭を乗せたまま。

隼のペニスが、俺の口の中で、ぴくぴくと痙



攣する。

射精後の余韻。

過敏な神経が、唾液の温度にも反応している。

「楓。舌、軽く動かせ」

「ん——」

「ゆっくりだ。亀頭の裏側だけ」

俺は舌を動かした。

亀頭の裏側、カリの溝に沿って、ゆっくりと  
舐め上げる。

隼の腰が、強く引いた。

ペニスの先端が、俺の舌から逃げようとする。

俺の手が、根元を押さえる。

逃さない。

「ぐっ——」

隼の声が、初めてかすれた。

俺は同じ速度で、舌を動かし続けた。

過敏な亀頭が、俺の舌の動きに耐えられない。

でも、俺は止めない。

査定の指示は「啜え続けろ」だったから。

亀頭の表面が、触れるだけで震えていた。

舌で擦るたびに、隼の太ももの内側が、目で見えるほど引き締まる。

俺の口の中で、隼のペニスが、もう一度膨らもうとしている。

射精直後なのに、再び硬度を取り戻し始めている。

「楓——」

隼の指が、俺の後頭部の毛を、強くつかんだ。

「もういい。離せ」

短い命令。

俺はゆっくりと口を離した。

隼のペニスは、唾液まみれで、まだ充血している。

俺の唇の端から、唾液と精液が、糸を引いて垂れた。

あごの先まで、白濁した液体が伝う。

俺はそれを、手で拭わなかった。

査定の指示を、まだ受けていないからだ。

「査定終了」

隼が査定タブレットを閉じた。

「楓」

「はい」

「明日も、午後九時。第七階層」

「はい」

「査定、加算しておく」

短い宣告。

俺はうなずいた。

首輪の重みが、喉に残っている。

俺の足元の床に、先走り液の跡が残っていた。

白く乾きかけている。

俺は服を着る順序を、頭の中で確認した。

下着、シャツ、スラックス、上着。

元探索者の手順。

査定室を出るとき、俺は1度だけ振り返った。

隼は、査定タブレットの画面を親指でなぞっていた。

ダンジョン管理局では今頃、本日の査定値が新規エントリーされたことだろう。

だが、その業務的な処理は、第七階層の閉鎖空間には届かない。

# 2

## 第2話

### 査定値、加算

---

首輪の革は、外す許可がまだ出ていない。

春分の翌々日、午前七時十六分。

俺は宿舎の共用洗面所で、その縁を1度だけ  
指でなぞった。

肌にうっすらと、革の跡がついている。

常時着用。

昨夜、隼に念を押された。

手元に、折り畳み手帳。

志乃の写真は、宿舎の机に置いたままだ。

手帳の内側に、新しい付箋を一枚足した。

査定値、加算しておく。

俺自身の字で、昨夜の宣告を書き留めた。

業務日報のつもりだった。

仕事の記録は、文字に残す。

元探索者の習慣だ。

かつての俺なら、こんな業務日報は提出しなかっただろう。

査定室での口腔反応値、平温37.6度。

採取量、十分。

数値だけが、俺の昨夜の証拠だ。

志乃の魔毒は、3年経っても抜けない。

俺はあと5年、この業務を続ける。

洗面所の鏡に、自分の首輪が映っている。

黒い革と銀の縁。



探索者ライセンス首輪は、本来は魔力測定具だ。

だが、俺の首にあるそれは、査定対象を識別する印になっている。

外せない。

外す気もない。

それが、業務の手順だからだ。

講師棟の食堂で、俺は自分のコーヒーを苦いまま飲んでいた。

ミルクは入れない。

砂糖も入れない。

現役時代の頃から、変わらない癖だ。

探索中に味覚を鈍らせないため、刺激のある飲み物は避けていた。

「楓先輩」

声に振り返ると、凜が向かい側に立っていた。

手にトレーを持ち、勝手に俺の前に座る。

「相席、いいかな」

「いま、立つところでした」

「いいから、座って」

凜が俺の腕を、軽く押さえた。

強くはない。

だが、俺を留める力だ。

「主任直々の査定、楽しんでる？」

凜の声は、相変わらず表面だけ柔らかい。

「業務です」

俺はそう返した。

仕事の話だ。

仕事の話なら、揺れない。

「楓先輩、変わったね」

「そうですか」

「現役時代の楓先輩なら、こんな扱い、受け  
なかった」

俺は何も返さなかった。

凜の言う通りだ。

現役時代の俺なら、契約書18条に署名しなかつ

ただらう。

だが今の俺は、署名した。

それだけのことだ。

「……今日も、夜は」

「査定です」

凜の口元が、ぴくりと動いた。

「お疲れさま、楓先輩」

凜がコーヒーを一口飲んだ。

俺はカップを置く。

仕事に向かう時間だ。

日中、第三階層の実技指導。

俺は新人講師として、模擬訓練を担当した。

生徒は5名。

基礎の剣術と、罾回避。

俺は教官の業務を、時間通りにこなす。

昼休みに、別の講師が俺の隣に座った。

「楓先生、聞いた？」

「何をです」

「あなた、主任直々の査定対象だって」

その講師は、軽く笑った。

悪意はない。

好奇心が滲んでいる。

「がんばって」

俺はうなずいた。

業務だ。

査定は仕事の一環だ。

俺はそう、自分に言い聞かせている。

午後九時。

査定室の扉を開ける。

隼は、すでに査定タブレットを操作していた。

「楓。来たな」

「指示通り、伺いました」

昨夜と同じ会話。

俺は服を脱ぐ順序を、頭の中で確認した。

上着、シャツ、スラックス、下着。

「今日の査定項目は、2点ある」

隼が査定タブレットの画面を見せた。

第3項目、第4項目。

数字だけが、整然と並んでいる。

「採取の温度測定。それと、自己制御の計測」

「はい」

「服を脱げ」

俺は黙って脱いだ。

昨夜より、手の動きが速くなっている。

業務手順は、繰り返すほど洗練される。

査定台の脇のスタンドに、上着を掛ける。

脱ぎ終えた。

「査定マグを持て」

隼が、白い陶器のマグを差し出した。

昨夜、俺が隼の精液を吐き出した、あのマグだ。

俺は両手でマグを受け取る。

冷たい陶器の感触。

「お前のものを、このマグに採取する」

「はい」

「俺は触らない。お前自身の手で出せ」

「……はい」

自慰、という業務指示だった。

俺は息を吐いた。

業務だ。



査定の仕事だ。

「ただし条件がある」

隼の声が、低くなった。

「俺の許可なく、萎えるな」

「……はい」

「萎えた瞬間、査定値、減算する。逆に、採取量と温度が基準を上回れば、加算」

俺は査定台の縁に立った。

右手にマグを持つ。

左手を、自分のペニスに添える。

まだ反応していない。

昨夜の感覚が、体には残っているはずだった。

俺はゆっくり、根元から扱き始めた。

手のひらの体温が、ペニスに伝わる。

血流が動き始める音が、自分の耳に聞こえる  
気がした。

亀頭の輪郭が、緩やかに膨らんでいく。

「速い反応だな」

隼の声。

俺は答えない。

業務に集中する。

「昨夜の感覚を、お前の体は覚えているらしい」

ペニスが、半勃起まで来ていた。

血管が浮き、亀頭の先端が薄く赤らむ。

俺は手の動きを変えた。

根元から先端へ、先端から根元へ。

元探索者の俺は、自分の体の使い方は、わかっている。

効率よく、最短で、業務を達成する。

「マグの位置、確認しておけ」

隼の指示。

俺は右手のマグを、ペニスの先端の真下に持ってきた。

採取の準備。

「先走り液が、もう垂れている」

隼の声。

俺の亀頭の先端から、透明な液体が一筋、糸を引いてマグに落ちた。

濁った音。

マグの底に、最初の一滴が広がる。

「採取値、初期記録」

ペンが査定シートを擦る音。

俺は手の動きを速めた。

粘った音が、査定室に立ち始める。

ぐち、ちゅく、と音がする。

先走り液が潤滑になり、皮の表面が滑らかに動く。

俺の腰の奥に、熱が集まってきた。

「楓」

「は——」

「もう一段、速度を上げろ」

俺は速度を上げた。

手のひらが、ペニス全体を強く擦る。

亀頭が、手の中で完全に勃起上がっている。

血管が、はっきりと浮き出した。

射精の予感。

俺の腰の奥に、波が押し寄せた。

「採取に入ります」

俺は宣告した。

業務の手順だ。

報告、行動、結果。

「いい。出せ」

隼の声と同時に、俺のペニスが跳ねた。

1発目が、マグの底に当たる。

白濁した液体が、勢いよく噴出した。

2発目、3発目。

マグの内壁に、白い筋が走る。

「ぐっ——」

俺の喉から、声が漏れた。

自分でも止められない。

4発目、5発目。

ペニスの根元が、がくがくと震えている。

マグの中に、白濁した液体が溜まっていく。

「採取量、確認」

隼が俺の手元のマグを、軽く揺らした。

白い液体が、マグの内壁にねっとりと張り付く。

隼の手が、マグに添えられた。

手のひらで、マグの底を包む。

「あたたかいな」

短い感想だった。

体温と同じくらい、俺の精液は温度を持っている。

その温度を、隼は手のひらで確かめた。

「平温37.4度。許容範囲」

隼が査定シートに数字を書き込む。

俺は荒い息を、整えようとしていた。

ペニスは、まだ充血している。

マグの中の精液が、ねっとりと底に沈んでいく。

空気に触れた表面が、すでに乾き始めていた。

俺自身の体から出たものを、自分の目で見て  
いる。

自分の精液の温度を、隼の手のひらが計測した  
事実だけが、査定室の空気に残っている。



「萎えるな」

隼の指示。

俺は気づいていた。

昨夜の指示と同じ。

査定の条件だ。

俺は左手を、ペニスから離せない。

握り続けたまま、ゆっくり、軽く扱う。

硬度を、保つために。

「だが、今夜はこれで終わりじゃない」

隼が査定タブレットを置いた。

第4項目。

俺の目の前に、画面が向けられる。

「自己制御の計測」

隼が、自分のスラックスのファスナーを下ろした。

ジー、と音がする。

昨夜の音と、同じだった。

隼の下着の中で、ペニスが布を押し上げていた。

昨夜、俺の口で採取した、あの大きさ。

俺はそれを、見ている自分に気づく。

「お前と俺、同じ条件で並ぶ」

「並ぶ……」

「先に出した方が、負けだ」

俺の喉が、1度だけ鳴った。

業務の指示が、また形を変えた。

「俺は査定者だが、今夜は計測対象でもある。

お前と同じ立場で、計測される」

「はい」

「ただし、お前は萎えてはいけない。萎えた

時点で、お前の負け」

二重の条件だった。

俺は息を吐いた。

業務として、処理する。

隼が下着をずらした。

隼のペニスが、出てきた。

昨夜と同じ。

大きい、太い。

もう完全に、勃起している。

俺の隣に、隼が並んで立った。

肩が、触れる距離。

査定台の縁に、二人の腰が並ぶ。

「始める」

隼が、自分のペニスを握った。

俺も、自分のペニスに手を添える。

まだ硬度は保っている。

業務として、扱っていた。

二つの手の動きが、隣で並ぶ。

粘った音が、左右から立つ。

俺の手は、効率を優先する。

隼の手は、ゆっくりだった。

ペースを掌握している、査定者の手だ。

「楓」

「は——」

「追加の指示だ。出そうになったら、止めろ」

俺の動きが、止まりかけた。

「萎えるな。だが、出すな」

「……それは」

「業務だ。査定項目に書いてある」

二重の縛りが、三重になった。

硬度を保ちつつ、射精を遅らせる。

元探索者の俺は、戦闘中の身体制御に慣れている。

心拍を整え、神経を整える。

射精の波を、引き戻す。

俺は手の動きを、根元の振動だけに切り替えた。

亀頭への刺激は、最小限に。

硬度は、保つ。

射精の予兆だけ、抑える。

「面白いな」

隼の声。

俺が射精のタイミングを引き戻したのに、気づいたらしい。

「業務手順だけじゃない。お前は意識的に、自分の体を制御している」

隼が、自分のペニスを抜く速度を、1段階上げた。

俺の隣で、亀頭の輪郭が、はっきり膨らんでいく。

先走り液が、隼の指の間に滲んでいた。

「俺は、お前より先に出す気はない」

「……」

「お前の負けを、誘うのが俺の役目だ」

俺は答えなかった。

業務に集中する。

隼が、手を伸ばした。

俺の腰の側面に、指が触れる。

「触らないと言ったが、これは別だ。査定の  
補助だ」

隼の指が、俺の腰骨の窪みを、軽く撫でた。

神経の集まる場所。

俺の体が、1度だけ跳ねた。

ペニスに、再び熱が集まり始める。

俺は手の動きを、止めようとした。

「止めるな。萎えるぞ」



隼の指示。

俺は手を動かす。

だが、隼の指が、俺の腰骨をまた撫でた。

射精の波が、もう一度押し寄せる。

俺は呼吸を整え、もう一度抑え込む。

寸止めの瞬間。

ペニスの先端から、先走り液が、ぼたぼたと  
床に垂れた。

「ぐっ——」

俺の喉から、声が漏れる。

全身に、汗が滲んでいた。

査定室の冷えた空気の中で、俺の体だけが熱

を持っている。

「もう一度。出そうになったら、止めろ」

隼の声。

俺は手を動かし続ける。

また波が来る。

寸止め。

手を動かし、体は反応し、寸前で抑える。

「楓、何度目だ」

隼が査定シートに何かを書き込む音。

俺は答えられなかった。

もう、数えていなかった。

寸止めの繰り返しで、頭の中が白くなってい

た。

「3回目だ。次が4回目」

隼の指が、また俺の腰骨を撫でた。

俺のペニスが、跳ねる。

寸止め。

また、寸止め。

俺の太ももの内側が、汗で濡れていた。

査定室の冷えた空気の中で、俺の体だけが熱を帯びている。

ペニスの先端から、もう先走り液は出ていない。

体内から、絞り尽くされている感覚。

なのに、隼の指の動き一つで、俺の腰は跳ね続ける。

「楓、5回目だ」

隼の声。

俺は答えられない。

寸止めの繰り返して、頭の中が白くなっていた。

業務として処理しているはずの行為が、自分の意思の埒外で進んでいく。

隼が、自分のペニスから手を離れた。

俺の左手の上に、隼の右手が重ねられた。

「ここからは、業務指示だ」

隼の指が、俺の手の動きをコントロールしようとする。

「俺の手の速度に、お前の手を合わせろ」

隼の手が、俺の手を引いた。

俺のペニスは、隼の手のリズムで扱われている。

ゆっくり、確実に。

射精の波を、抑える余地がない。

「ぐっ——」

俺の喉から、声が漏れた。

隼の手が、俺の手を加速させた。

俺のペニスから、先走り液が垂れていく。

「出せ」

隼の声。

短い命令。

「出さないと、萎える。萎えたら、減算」

逃げ道がなかった。

業務として、出すしかない。

俺は腰を、引いた。

ペニスの根元から、射精の波が来る。

「ぐっ、うー」

1発目が、査定台の床に飛び散った。

マグは、もう手元になかった。

昨夜と同じ、白濁した液体が床を汚していく。

2発目、3発目。

俺のペニスが、隼の手の中で何度も脈打つ。

4発目が、隼の手の甲まで届いた。

白い筋が、隼の指の間にも飛んでいる。

隼の手は、止まらない。

射精中の俺のペニスを、握り続けている。

過敏になった神経が、隼の手のひらの摩擦に  
悲鳴を上げる。

俺の腰が、勝手にがくがくと跳ねる。

止められない。

「楓、負けだ」

隼の声。

俺はうなずく余裕もなかった。

ペニスの先端から、最後の一滴が、糸を引いて落ちる。

白濁した液体が、床と俺の太ももの内側を伝う。

査定室の床に、二つの跡が広がっていた。

昨夜の先走り液の跡と、今夜の射精物の跡。

俺自身の体から出たものが、業務記録の証拠として残されている。

「査定値、加算しておく」

隼の宣告。

昨夜と同じ言葉。



俺の喉に残った首輪の重みが、また1段階増えた。

「だが、お前の方が先に出した。減算分も記録する」

隼が査定タブレットに、数字を打ち込む。

「次の査定で、回復させろ」

「……はい」

「明日も、午後九時」

「はい」

「査定値、加算しておく」

短い宣告だった。

俺はうなづく。

隼が査定室を出ていく。

俺は床の白濁した液体を、自分で拭くよう指示された。

備品の清掃布を取り出して、業務として処理する。

元探索者の俺が、自分の精液を拭いている。

凜は今頃、別の任務で第二階層のスライム掃討をしているだろう。

だが、俺の査定室の数値は、誰にも届かない。

## 体験版はここまで

---

これは、まだ入口です。

この先で、すべてが変わります。  
選択も、関係も、そして――結果も。

知らないままで終わるか、  
それとも、最後まで見届けるか。

答えは、本編にあります。

【体験版】ダンジョン残業